

珙瑯質と白亜質の名称は、14冊の教科書すべてに共通であったが、象牙質については、以下の如く、年代的に差異がみられた。

〔1〕明治21年6月9日：牙質。2）明治27年5月4日：象牙質。3）明治34年4月27日：齒質。4）明治37年3月20日：齒質。5）明治40年1月9日：齒質。6）明治43年1月17日：齒質。7）明治43年2月24日：象牙質。8）大正3年12月17日：象牙質。9）大正5年12月14日：齒質。10）大正6年12月20日：象牙質。11）大正6年12月24日：象牙質。12）大正11年2月23日：齒質（象牙質）。13）昭和5年1月16日：象牙質。14）昭和11年12月4日：象牙質。〕

明治19年4月10日、「学校令」が公布されて以来、その後も中学校令や高等女学令の一部改正、規則補正が幾度か行われた。しかも本質的には、大戦後の新教育制度が発足するまでの長期に亘って、この制度・内容は継続されたのである。

13) 明治中期のお歯黒習俗について一和歌山県の歯科医中村好正述「(明治25-26年) 来患者中涅齒者ノ統計報告」より

About the Patient's Tooth Black Manners and Customs that the Dental Practitioner of Wakayama Prefecture Reported from 1892 to 1893

医の博物館 樋口 輝雄

Teruo Higuchi, Museum of Medicine and Dentistry

お歯黒は涅齒、鉄漿(かね)、女元服とも呼ばれ、江戸時代には既婚女性の習俗となった。江戸後期の文化10年(1813)に刊行され、伝統的な化粧法を体系づけた『女子愛敬/都風俗化粧伝』には、「虫くい歯のいたみ治す薬の伝」「鼻の低さを高う見する伝」などととも、「鉄漿(かね)を付ける伝」が収録されている。谷崎潤一郎は『陰翳礼賛』の中で、「……鉄漿などと云う化粧法が行われたのも、その目的を考えると、顔以外の空隙へ悉く闇を詰めてしまおうとして、口腔へまで暗黒を啣(ふく)ませたのではないであろうか」と述べているが、お歯黒の習俗は、日本家屋内の光彩や女性の

挙措から生じた、極めて蠱惑的化粧法だったのだろう。

このお歯黒の弊害について、明治5年、福沢諭吉の『かたわ娘』出版を機に、当時の新聞紙上で「涅齒禁令論」が論議された。歯科医の側からは、明治12年に桐村克巳が郵便報知新聞に「涅齒の害を論ず」を投稿し、「……涅齒は齒の不養生の最も大なるものなり。婦人たるもの、あに省みざるべけんや」と世人に訴えた。また、高山紀斎は『保齒新論』(明治14年)の中に「第二十 鉄漿論」の章を設け、世界の三大悪習慣として、西洋婦人のコルセット装着による細腰、中国女性の纏足、日本女性のお歯黒をあげ、涅齒の起原については『嬉遊笑覧』の記述を引用している。

そして、お歯黒に関する定点的・定時的な実態調査としては、和歌山県の歯科医中村好正による「来患者中涅齒者ノ統計報告」が唯一のものだろう。この報告は、明治27年3月の『歯科研究会月報』第39号に掲載されており、「明治25年5月より同年12月に至る8ヶ月間の女子来患者総数は142人にしてこの内未婚の者43人と無齒の老嫗2人を除けば、既婚婦97人、素齒の者25人、25.7%、涅齒者72人、74.3%、……26年1月より同年12月に至る1ヶ月間の女子来患者総数は447人にして、この内未婚の者158人と無齒の者老嫗1人を除く既婚婦288人、素齒の者86人、29.96%、涅齒者202人、70.04%」と具体的な数値をあげている。中村は「当時わが和歌山県における涅齒者の多きことを知らるべし。余は今後ますます進んでこの未開を表す所の涅齒者を退治するに怠らざらんと欲す。請う、諸君においてもこの有害無益なる涅齒者は一日も早くわが国を放逐してその痕跡をだも見るべからざるに至らしめんことを」と結んでいるが、この報告によっても、お歯黒が齲蝕を予防したという説には疑問を感じざるを得ない。

中村好正は和歌山市の中心街において、県下ではただ一人の免許を所持する歯科医(1864年生、歯科医籍番号100番)として開業していた。東京に居住していたときには、歯科研究会の第7回例会(明治24年7月)で、「喫煙ハ齲齒ノ最良薬ナリ」、第16回例会(同25年2月)で「歯科医死体検査ニ就テ」を講演し、その要旨は『歯科研究会月報』に掲載されている。